

# 結果報告書の見方

検査項目		解説
身体計測	BMI	身長と体重から計算される肥満度の指標です。
	腹囲	へその位置で測った胴回りの長さで、内臓脂肪の程度を判断します。
	視力	近視や遠視、乱視の場合に低下します。
血圧	最高血圧 最低血圧	心臓のポンプ機能や血管の状態が正常かどうかわかります。高血圧の場合、脳・心血管疾患、腎臓病のリスクが高くなります。
聴力	1000Hz 4000Hz	1000Hz（低音）と4000Hz（高音）で検査を行い、30dB（音の大きさ）以下の音が聴こえれば正常です。それ以上の大きさの音でないと聴こえない場合、難聴や中耳炎を疑います。
眼科	眼圧	眼球の中は房水という液体によって圧力が保たれており、これを眼圧といいます。高い場合、高眼圧症、緑内障を疑います。
	眼底	目の奥にある血管、網膜、視神経の状態を調べます。動脈硬化の程度、高血圧、糖尿病による眼の合併症や緑内障・白内障の有無などがわかります。
肺機能	%肺活量	年齢、性別、身長から算出された予測肺活量に対して、実際の肺活量が何%であるかを調べます。80%未満では肺のふくらみが悪いことを意味し、間質性肺炎や肺線維症などを疑います。
	一秒率	最大に息を吸い込んでから一気に吐き出すときの、最初の1秒間に何%の息を吐き出せるかを調べます。70%未満では肺の弾力性の低下や気道の閉塞を意味し、慢性気管支炎や肺気腫などの慢性閉塞性肺疾患を疑います。
骨密度	OSI OSI年齢比 OSI平均値	骨の強さが同年齢の平均値に対して何%か（OSI年齢比）、若年成人の平均値に対して何%か（OSI平均値）を調べます。数値が低いほど骨がもろいことを意味し、骨粗鬆症の早期発見と予防に役立ちます。
尿検査	pH	正常は弱酸性（pH6.0位）で、食生活により変動します。過度の肉食、過食、カルシウム不足で酸度が高くなると尿路結石の原因となります。
	比重	尿比重が高い場合、糖尿病、脱水症などを疑います。低い場合、腎不全、尿崩症など尿を濃縮する機能の低下を疑います。
	蛋白	腎機能が低下すると体にとって必要な蛋白が腎臓から漏れ出て、尿蛋白が陽性となります。また激しい運動や疲労でも軽度の陽性となることがあります。
	糖	血液中の糖濃度がある値（おおよそ160～180mg/dL）を超えると、尿中に糖が漏れ出てきます。糖尿病、甲状腺機能亢進症や腎性糖尿などで陽性となります。
	ケトン体	糖尿病、絶食、発熱などで陽性となります。
	潜血	腎臓や尿路に炎症、結石、腫瘍などがあると尿潜血が陽性となります。女性では病気がなくても陽性となることがあります。
	ウロビリノーゲン	正常は（±）です。胆道系の障害で胆汁が排出されない場合は陰性、肝障害で血中ビリルビン値が上昇すると強陽性となります。便秘でも陽性となります。
糖代謝	血糖	糖とは血液中のブドウ糖のことで、エネルギー源として全身で利用されます。数値が高い場合は、糖尿病、膵臓の病気、ホルモン異常を疑います。
	HbA1c	過去1～2ヶ月の血糖の平均的な状態を反映するため、糖尿病の有無や糖尿病治療における血糖コントロール状態がわかります。

検査項目		解説
脂質	総コレステロール	血液に含まれる脂質の一種で、細胞やホルモンを作るために必要な物質です。数値が高い場合は、動脈硬化を進行させ、脳梗塞や心筋梗塞などのリスクが高くなります。
	HDLコレステロール	善玉コレステロールと呼ばれ、血液中の悪玉コレステロールを回収し、動脈硬化を防ぐ働きをします。数値が低い場合、脂質代謝異常、動脈硬化を疑います。
	LDLコレステロール	悪玉コレステロールと呼ばれるものです。数値が高い場合、血管壁に蓄積して動脈硬化を進行させ、脳梗塞や心筋梗塞などのリスクが高くなります。
	non-HDLコレステロール	『non-HDLコレステロール = 総コレステロール - HDLコレステロール』で計算され、LDLコレステロールだけでなく動脈硬化に起因するすべてのコレステロールを表します。数値が高い場合、動脈硬化、脂質代謝異常、甲状腺機能低下症、家族性高脂血症などを疑います。低い場合、栄養吸収障害、低βリポ蛋白血症、肝硬変などを疑います。
	中性脂肪	高カロリー食やアルコールの過飲などで過剰に摂られたエネルギーは中性脂肪として貯蔵されます。数値が高い場合、動脈硬化を進行させます。低い場合、低βリポ蛋白血症、低栄養などを疑います。
腎機能	尿素窒素	蛋白が分解されたときにできる老廃物で、これらは腎臓から尿中に排出されます。数値が高い場合、腎臓の機能が低下していることを意味します。
	クレアチニン	アミノ酸の一種であるクレアチンが代謝されたあとの老廃物です。筋肉量が多いほどその量も多くなるため、基準範囲に男女差があります。数値が高い場合、腎臓の機能が低下していることを意味します。
	eGFR	クレアチニンより精度の高い腎臓機能の指標です。クレアチニン値を性別、年齢で補正して算出します。数値が低い場合、腎臓の機能が低下していることを意味します。
	ナトリウム カリウム クロール カルシウム 無機リン	血液中のナトリウム、カリウム、クロールの濃度により、その過不足、バランス、栄養状態や腎臓の状態を知ることができます。また、カルシウムや無機リンから、骨や副甲状腺の状態を知ることができます。利尿剤を服用している場合、カリウムが低値となることがあります。
尿酸	蛋白質の一種であるプリン体が代謝された後の残りかすのようなものです。数値が高い場合を高尿酸血症といいます。高い状態が続くと結晶として関節に蓄積していき、突然、関節痛（痛風発作）をおこします。また、尿路結石の原因にもなります。	
肝機能	総ビリルビン	赤血球には寿命があり、毎日少しずつ壊れています。その際、ヘモグロビンが分解されて生じるものがビリルビンです。血液中のビリルビンの数値により黄疸、肝・胆道系疾患の有無やその程度がわかります。
	AST (GOT) ALT (GPT)	AST (GOT) は心臓、筋肉、肝臓に多く存在する酵素です。ALT (GPT) は肝臓に多く存在する酵素です。数値が高い場合、急性肝炎、慢性肝炎、脂肪肝、肝臓がん、アルコール性肝炎などが疑われます。ASTのみ高い場合は心筋梗塞、筋肉疾患などを疑います。
	ALP	体のほとんどの臓器に含まれている酵素で、主に肝臓、胆管、骨、胎盤などに多く分布しています。これらの臓器の疾患で血液中の数値が高くなります。
	ガンマ γ-GTP	肝臓や胆道の疾患で数値が高くなります。アルコールの影響で高値になりやすく、常習飲酒による肝障害の指標となります。
	LDH	肝臓、心臓、血液、骨格筋の疾患や各臓器のがんなどで数値が高くなります。
	総蛋白	血液中の総蛋白の量を表します。数値が高い場合、多発性骨髄腫、慢性炎症、脱水などを疑います。低い場合、栄養障害、ネフローゼ症候群、がんなどを疑います。
	アルブミン	血液中の蛋白で最も多く含まれるのがアルブミンで、肝臓で合成されます。数値が低い場合、肝臓障害、栄養不足、ネフローゼ症候群などを疑います。

検査項目		解説
膵臓	血清アミラーゼ	膵臓や唾液腺から分泌される酵素です。数値が高い場合、膵炎などの膵臓の病気を疑います。
鉄分	血清鉄	血液中の鉄分を表します。赤血球に含まれるヘモグロビンを作るための材料で、不足すると赤血球の産生量が低下し、鉄欠乏性貧血を引き起こします。
免疫血清	HBs抗原	陽性の場合、B型肝炎ウイルスの感染が疑われます。
	HCV抗体	陽性の場合、C型肝炎ウイルスの感染が疑われます。
	HBs抗体	陽性の場合、過去にB型肝炎ウイルスに感染したことを表します。また、B型肝炎ワクチン接種でも陽性になります。
	梅毒TP抗体	梅毒に感染しているか（感染したことがあるか）を調べます。ただし、結核、膠原病など梅毒以外でも陽性になることがあります。
	CRP	体内で細菌やウイルス感染による炎症がおきたり、がんなどにより組織に傷害がおけると血液中の数値が高くなります。
腫瘍マーカー	CA19-9 <sup>※</sup>	膵臓がん、胆管がんなどで数値が高くなります。また、がん以外の膵炎や胆石でも高くなる場合があります。
	前立腺特異抗原 <sup>※</sup>	前立腺腫瘍で数値が高くなります。腫瘍以外にも、前立腺肥大症や急性前立腺炎、前立腺に物理的な刺激が加わった場合も高くなる場合があります。
	CA125 <sup>※</sup>	卵巣や子宮の腫瘍、妊娠初期、月経期などで数値が高くなります。
甲状腺	TSH FT3 FT4	甲状腺ホルモンであるFT3とFT4、それらの調節機能をもつホルモンであるTSHの数値から、甲状腺疾患の有無や甲状腺の働きが正常であるかを調べます。
便検査	潜血 (ヒトヘモグロビン)	大腸からの出血の有無を調べます。陽性の場合は大腸ポリープ、大腸がん、痔などを疑い、精密検査が必要です。
	トランスフェリン	トランスフェリンは、ヘモグロビンと比べて便中の細菌による失活が少なく安定しているため、大腸からの出血をより正確に知ることができます。
血液一般	白血球	白血球は細菌などから体を守る働きをしています。数値が高い場合、細菌感染症、炎症、腫瘍の存在が疑われますが、どここの部位で発生しているかはわかりません。低い場合、ウイルス感染症、薬物アレルギー、再生不良性貧血などを疑います。
	赤血球	赤血球は肺で取り入れた酸素を全身に運び、不要となった二酸化炭素を回収して肺へ送る役目を担っています。数値が高い場合は多血症、低い場合は貧血を疑います。
	ヘモグロビン (血色素)	ヘモグロビンとは赤血球に含まれるヘム蛋白質で、酸素の運搬役を担っています。数値が低い場合、鉄欠乏性貧血などを疑います。
	ヘマトクリット	血液全体に占める赤血球の割合です。数値が高い場合、多血症、脱水などを疑います。低い場合、鉄欠乏性貧血などを疑います。
	MCV MCH MCHC	MCV（赤血球の平均的な大きさ）、MCH（赤血球1個あたりの平均ヘモグロビン量）、MCHC（赤血球の平均ヘモグロビン濃度）のそれぞれの数値からどのような種類の貧血が疑われるかを判断します。
	血小板	血小板は、出血したときその部分に粘着して出血を止める役割を果たしています。数値が高い場合、血小板血症、鉄欠乏性貧血などを疑います。低い場合、再生不良性貧血、特発性血小板減少性紫斑病、肝硬変などを疑います。
	血液像	5種類の白血球（好中球、好酸球、好塩基球、単球、リンパ球）の構成割合を表したものです。病気によってその比率に変化がみられ、様々な病気を見つける手がかりとなります。

※腫瘍マーカーは、腫瘍ではない病気でも数値が高くなる場合や、腫瘍があっても数値が高くないこともあります。

検査項目		解説
診察	内科診察	見ることで異常がないかを判断する視診、触れて異常なものを見つける触診、聴診器を当てて異常音が聞こえないかを調べる聴診などがあります。
心臓	安静心電図	心臓の電気信号を波形として記録し、その波形から心臓の状態を把握する検査です。不整脈や心筋の状態がわかります。
	負荷心電図	一定時間運動（階段昇降）を行い、心臓に負荷を与えることで安静時には現れない心電図の変化がわかります。
	心臓超音波	心臓の大きさや動き、血液の流れに異常がないかを調べます。心臓弁膜症、心筋の肥大や拡張、先天性心疾患、心筋梗塞やそれに伴う合併症などがわかります。
	血圧脈波	血管年齢、動脈硬化の程度、下肢動脈の詰まりの程度などがわかります。ABIが0.90以下では末梢動脈疾患を疑います。
呼吸器	胸部X線 胸部CT	肺炎、肺結核、肺がん、肺気腫、気胸などの呼吸器疾患の有無とその程度がわかります。
	喀痰細胞診	痰の中の細胞成分を顕微鏡で観察し、肺や気管支などの細胞の悪性度を調べます。
超音波	腹部超音波 (肝胆膵腎脾)	腹部の臓器（肝臓、胆のう、膵臓、腎臓、脾臓など）の形態、腫瘍や結石などの病変の有無がわかります。ただし、体格や腸管ガスの影響により膵臓などの一部の臓器が観察しにくい場合があります。
食道・胃	胃部X線 胃内視鏡	食道、胃、十二指腸のポリープ、潰瘍、がんなどがわかります。
	胃がんリスク検査	血液からピロリ菌感染の有無と胃粘膜の萎縮の程度を調べることで、胃がんになるリスクを評価します。
頭・頸部	頭部MRI 頭部MRA	脳腫瘍や脳梗塞、くも膜下出血などの危険因子（脳血管の狭窄・梗塞、脳動脈瘤など）を調べます。
	頸動脈超音波	脳に血液を送る頸動脈のプラークや血栓などによる狭窄や閉塞の有無を調べます。
	甲状腺超音波	甲状腺の大きさや内部に腫瘍ができていないかを調べます。
その他	内臓脂肪CT	CTを用いて内臓脂肪の量を調べます。
	体組成検査	体を構成する基本成分である体水分、タンパク質、ミネラル、体脂肪を分析し、栄養状態やむくみの有無、筋肉のつき方のバランスなどを評価します。
婦人科	子宮頸がん細胞診	子宮頸部の粘膜から細胞を採取して、顕微鏡でがん細胞の有無を調べます。また、トリコモナス膣炎、カンジダ膣炎などの感染もわかります。
	内診	触診により子宮の状態を調べます。
	経膣超音波	子宮がん、卵巣がん、子宮筋腫、卵巣のう腫などがわかります。
乳房	乳腺超音波	乳房内の腫瘍の有無、腫瘍の大きさなどがわかります。乳腺が発達している若い方でも腫瘍を見つけやすく、小さな腫瘍も発見できるのが特徴です。
	マンモグラフィ	乳がんの特徴的にみられる小さな石灰化の描出に優れており、早期乳がんの発見に有用です。
	無痛乳房MRI (DWIBS search)	痛くない、見られない、被ばくの心配がない乳がん検査です。日本人の半数を占めると言われる、乳腺の密度の高い高濃度乳房に対しても精度の高い検査です。

●お問い合わせ

予防医療センター

TEL : 0566-75-3020

愛知県厚生農業協同組合連合会 安城更生病院

TEL : 0566-75-2111 (代表)

〒446-8602 愛知県安城市安城町東広畔28番地